

# 『雲門録』後録の基礎的研究（上）

水野 実・小池 直・中嶋 諒編

本稿は薛侃の語録『雲門録』後録についての基礎的研究である。『雲門録』後録は『雲門録』の直後に附刻される薛侃の語録であるが、『王門宗旨』収録の際には『雲門録』の題で一括して合刻されていたものであろう。その序によれば『雲門録』編纂の翌年、すなわち嘉靖十年（一五三一）にまとめられたものであるという。今回の研究は、『雲門録』の基礎的研究」（上）・（下）についての成果を発表した後、水野・中嶋・小池が研究会を組織して研究を継続し、その成果をまとめたものである。前号と同じく中嶋が下原稿を作成し、それに小池が修正を加え、さらに三者で再度検討を行った。

## 後録

中離先生嘗緝其語爲雲門録。明年九月是爲嘉靖辛卯。復見先生于雲門、乃述所聞爲續録。不以合於前録者、以前編嘗經先生是正、不欲亂之云爾。

〔訓読〕

中離先生 嘗て其の語を緝めて雲門録と爲す。明年九月 是れ嘉靖辛卯と爲す。復た先生に雲門に見え、乃ち聞く所を述して続録と爲す。以て前録に合せざるは、前編嘗て先生のは正するを經、之を乱すを欲せざるを以てなりと爾しかい云ふ。

〔語釈〕

○嘉靖辛卯 嘉靖十年（一五三一）。『雲門録』編纂の翌年にあたる。

【一】

潤問、「向日先生教以靜坐。初苦思慮不定、乃反觀內照、一意收斂向裏。但臨時似一心在內、又有一心在外、是二心也。自覺不甚得力如此。日餘後、偶見得一身視聽應酬、莫不是這箇。自此有常視常聽意思、乃覺無專內遺外之病、應事有得力處。久之又見得天地萬物莫不是這箇。又不特吾之一身而已。自此常常存箇天地萬物一體意思。後因讀天下何思何慮、又見得此心原無可思慮。凡有思慮、畢竟是私己的心。只去得私己的心、本體便常常這裏、何須思慮。一向來所見不同如此、不知畢竟何如。」先生曰、「工夫漸次是如此。初學時苦事物牽累、所以教人靜坐尋此心體、是欲忘物也。既能忘物、若一向收斂向裏、亦是係着。故程子曰、苟以心爲從物於外、則方其在外時、何者爲在內。所以又要忘己。正是良其背不獲其身、行其庭不見其人、內不見己、外不見人之意。到此境界、便是內外兩忘、澄然無事、便是何思何慮。且道何思何慮固是。

但中間必須有主、始得。」潤曰、「既曰何思何慮、則擴然順應。似不必更言主。」曰、「同歸而殊塗、一致而百慮。同歸一致處便是主。蓋我這箇道理、原是與天地同大、與日月同明、與萬物同流、與古今同悠久渾融。只是這箇、故曰同歸一致。這便是主、須常存在這裏。」潤問、「常存天地萬物一體意是否。」曰、「此却是騎牛覓牛。天地萬物便都在這裏。但存得這箇便是。何須又存天地萬物。」潤因言、「講論到此、便是做工夫處。蓋此工夫初不容着力、但識得破時、心體便在這裏、工夫亦便在這裏了。」先生曰、「此正聖賢之學異於俗學處。若俗學、却以講論與涵養分作兩件事。陽明先生嘗說、合得本體是工夫、做得工夫是本體。豈有兩件。」潤曰、「向聞先生謂不睹不聞便是戒謹恐懼。當時頗不解、後來用功、却覺道理是如此。」先生曰、「此工夫皆已有入處。自此不已、便是精義入神、便是窮神知化。」

# 「訓誥」

潤問ふ、「向日先生教ふるに靜坐を以てす。初め思慮の定まらざるに苦しみ、乃ち反觀内照し、一意に收斂し裏に向ふ。但だ時に臨み一心内に在り、又た一心外に在ること有るに似たり、是れ二心なり。自ら甚だしくは力を得ざるを覺ゆること此の如し。日餘の後、偶たま一身の視聽応酬、是れ這箇ならざる莫きを見（得）る。此れ自り常視・常聽の意思有り、乃ち内を専らにし外を遺すの病無きを覚え、事に応ずるに力を得る處有り。久ひさ之しくして又た天地万物是れ這箇ならざる莫きを見（得）る。又た特だに吾れの一身のみならず。此れ自り常常箇の天地万物一体の意思を存す。後に「天下何をか思ひ何をか慮らん」を讀むに因りて、又た此の心原もとより思慮すべき無きを見（得）る。凡そ思慮有るは、畢竟是れ私己の心。

只だ私己の心を去（得）れば、本体 便ち常 這裏にあり、何ぞ思慮するを須（も）ひん。一向來見る所同じからざること此の如し、知らず畢竟 何如（いかん）。先生曰く、「工夫 漸次に是れ此の如し。初学の時 事物の牽累するに苦しむ、所以に人をして静坐し此の心体を尋ねしむ、是れ物を忘れんことを欲すればなり。既に能く物を忘るるも、若し一向 收斂し裏に向かへば、亦た是れ係着す。故に程子曰く、「苟しくも心を以て物に外に従ふと為せば、則ち其の外に在るの時に方（あた）り、何者をか内に在りと為す。」所以に又た己を忘るるを要す。正に是れ「其の背を良め其の身を獲らず、其の庭に行き其の人を見ず」、「内に己を見ず、外に人を見ず」の意。此の境界に到れば、便ち是れ内外 両つながら忘れ、澄然として無事、便ち是れ「何をか思ひ何をか慮らん」。且つ道ふ、「何をか思ひ何をか慮らん」は固（もと）より是なり。但だ中間 必ず主有るを須（も）ちて、始めて得ん。」潤曰く、「既に「何をか思ひ何をか慮らん」と曰へば、則ち豁然として順応す。必ずしも更に主を言はざるに似たり。」曰く、「「帰を同じくして塗を殊にし、致を一にして慮を百にす」、帰を同じくし致を一にする処 便ち是れ主たり。蓋し我が這箇の道理 原より是れ天地と大を同じくし、日月と明を同じくし、万物と流を同じくし、古今と悠久渾融を同じくす。只だ是れ這箇、故に帰を同じくし致を一にす。這れ便ち是れ主、須らく常に這裏に存（在）すべし。」潤問ふ、「常に天地万物 一体の意を存するは是なるや否や。」曰く、「此れ却て是れ牛に騎し牛を覓（も）む。天地万物 便ち都て這裏に在り。但だ這箇を存（得）すれば、便ち是なり。何ぞ又た天地万物を存するを須（も）ひん。」潤因りて言ふ、「講論 此に到れば、便ち是れ工夫を做す処。蓋し此の工夫 初め力を着くべからざるも、但だ識（得）りて破するの時、心体 便ち這裏に

在り、工夫も亦た便ち這裏に在（了）り。」先生曰く、「此れ正に聖賢の学、俗学に異なる処。俗学の若きは、却て講論と涵養とを以て分ちて兩件の事と作す。陽明先生嘗て説く、「本体と合（得）するは是れ工夫、工夫を做（得）すは是れ本体」、豈に兩件有らんや。」潤曰く、「向に先生<sup>さき</sup> 睹<sup>み</sup>ざる聞かざるは便ち是れ戒謹恐懼と謂ふを聞く。当時頗る解せざるも、後來功を用ふるに、却て道理は是れ此の如しと覺ゆ。」先生曰く、「此の工夫皆な已に入る処有り。此れ自り已まされば、便ち是れ精義入神、便ち是れ窮神知化。」

〔語釈〕

○天下何思何慮 『周易』繫辭下「子曰、天下何思何慮。天下同歸而殊塗、一致而百慮、天下何思何慮。」

○苟以心爲從物於外、則方其在外時、何者爲在內 『河南程氏文集』卷三「答橫渠張子厚先生書」（いわゆる「定性書」）「苟以外物爲外、牽已而從之、是以己性爲有内外也。且以性爲隨物於外、則當其在外時、何者爲在內。是有意於絶外誘、而不知性之無内外也。」

○艮其背不獲其身、行其庭不見其人 『周易』艮・卦辭。「定性書」にも引用される。また程頤『易伝』に、「不獲其身、不見其身也。謂忘我也。无我則止矣。不能无我、无可止之道。」と註しているのも参照。

○内不見己、外不見人 朱熹『周易本義』艮・彖伝の註。

○内外兩忘、澄然無事 「定性書」に「与其非外而是内、不若内外之兩忘也。兩忘則澄然無事矣」とある。

○同歸而殊塗、一致而百慮 『周易』繫辭下、前掲。

○騎牛覓牛 禪語。『景德伝灯録』（大正五一・二六七中）や『碧巖録』（大正四八・一四七中）等に見える。

○與天地同大 『周易』乾・文言に「夫大人者、与天地合其德、与日月合其明、与四時合其序、与鬼神合其吉凶」とある。

○合得本體是工夫、做得工夫是本體 未詳。『王文成公全書』には見えない。

○不睹不聞便是戒謹恐懼 『中庸』、『雲門錄』第二条および第四十四条参照。

○精義入神・窮神知化 『周易』繫辭下「尺蠖之屈、以求信也。龍蛇之蟄、以存身也。精義入神、以致用也。利用安身、以崇德也。過此以往、未之或知也。窮神知化、德之盛也。」

## 【二】

先生謂潤曰、「汝今已尋得家當、但要家當大、乃自無出入時節。今人有出入、只因家當小、外面尚有落地。譬如以一家爲家者、出門便非其家矣。以一國爲家者、出境又非其家矣。若以天下爲家、則更無内外、又何出入。這道理本自徹天徹地、徹古徹今、何處不是這箇裏面。便是天下爲家一般。若人全不知用功者、却是未有家當、隨處寄泊」。

## 〔訓読〕

先生潤に謂ひて曰く、「汝今已に家當を尋（得）ぬ、但だ家當の大なるを要めよ、乃ち自ら出入の時節無けん。今人出入有るは、只だ家當小にして、外面尚ほ落地有るに因る。譬如たとへば一家を以て家と爲す者、門を出づれば便ち其の家に非ず。一国を以て家と爲す者、境を出づれば又た其の家に非ず。若し天

下を以て家と為せば、則ち更に内外無し、又た何ぞ出入せん。這の道理 本と自ら天に徹し地に徹し、古に徹し今に徹す、何れの処か是れ這箇の裏面ならざらん。便ち是れ天下を家と為すに一般。人の全く功を用ふるを知らざる者の若きは、却て是れ未だ家当有らず、随处に寄泊す。」

【語釈】

○家當 財産。人の才能や能力の例えとしても用いられる。

○出入 『孟子』告子上「孔子曰、「操則存、舍則亡。出入無時、莫知其郷。」惟心之謂与。」

【三】

教人靜坐、自是初學入門時事。既知入門、則講論應酬無往不是靜坐工夫、不須更言靜坐。

【訓読】

人に靜坐を教ふるは、自らはれ初學入門時の事。既に門に入るを知れば、則ち講論應酬 往くとして是れ靜坐の工夫にあらざる無し、更に靜坐を言ふ須ひをず。

【四】

天地萬物皆吾一體、非只懸空如此說、原來本是如此。且如人未生時、這箇知覺何所在。畢竟在天地萬物上。爲學正要復此本體。

〔訓読〕

天地万物皆な吾が一体とは、只だ懸空に此の如く説くに非ず、原来本と是れ此の如し。且如たとへば人未だ生まれざるの時、這箇の知覚何れの所にか在る。畢竟天地万物の上に在り。為学は正に此の本体に復するを要す。

【五】

潤問、「私欲難克。」先生曰、「誰將私欲頼在你。」

〔訓読〕

潤問ふ、「私欲は克ち難し。」先生曰く、「誰か私欲を將もつて你に頼なんぞ（在）らん。」

〔語釈〕

○頼 責任を負わせる。

【六】

人須識得眞己、方能克己。

〔訓読〕

人眞の己れを識（得）るを須まちて、方はめて能く己れに克つ。



【七】

克己非難。克己後能見道體大處爲難。

〔訓読〕

己れに克つは難きに非ず。己れに克ちて後に能く道体の大きな処を見るを難しと爲す。

【八】

潤問、「平時用功、覺得可強。惟臨得失利鈍、未免動心、何如。」曰、「心は活物、如何要不動。動心處、便是感而遂通。但不可離却本體。孟子自言不動心、却又云動心忍性。今人將此心字看作兩樣、不知心豈有兩樣。蓋此心本是流動圓轉的、若一無係着、使此心常活耳。心活則妙用無窮、自不離這本體、如珠走盤不出於盤。故又謂之不動心。非必塊然如木石然後爲不動也。聖人於得失之際、豈全然不知。但聖人知進退存亡而不失其正。所謂正者、正指吾心本體而言。本體常在、則損益盈虛與時偕行、自無所累。若常人則惟知欲得、故知進而不知退、知存而不知亡、知得而不知喪。如此則有所係着、乃是心死失其本體、安得不動。」

〔訓読〕

潤問ふ、「平時に功を用ふるに、強ふべきを覺（得）ゆ。惟だ得失利鈍に臨んで、未だ動心を免れざるは、何如。」曰く、「心は是れ活物、如何ぞ不動を要せん。心を動かす処は、便ち是れ感じて遂に通ず。但だ本

体を離却すべからず。孟子自ら「不動心」を謂ひ、却て又た「心を動かし性を忍ぶ」と云ふ。今人此の心字を將て兩様に看作す、知らず心に豈に兩様有らん。蓋し此の心本とは是れ流動円転するものにして、若し一も係着無からしめんとすれば、此の心をして常活せしむるのみ。心活なれば則ち妙用無窮、自ら這の本体を離れず、珠の盤を走りて盤を出でざるが如し。故に又た之を不動心と謂ふ。必ず塊然として木石の如くにして、然る後不動と為すに非ざるなり。聖人得失の際に於て、豈に全然として知らざらん。但だ聖人進退存亡を知りて、其の正を失せず。所謂の正とは、正に吾が心の本体を指すして言ふ。本体常に在れば、則ち損益盈虚時と偕に行り、自ら累ふ所無し。常人の若きは、則ち惟だ得んと欲するを知るのみ、故に進むを知りて退くを知らず、存するを知りて亡ふを知らず、得るを知りて喪ふを知らず。此の如くれば、則ち係着する所有り、乃ち是れ心其の本体を死失す。安んぞ不動を得ん。」

【語釈】

○心是活物 『河南程氏遺書』卷二上「前日思慮紛擾、又非義理、又非事故、如是則只是狂妄人耳。懲此以為病、故要得虚靜。其極欲得如槁木死灰、又却不是。蓋人活物也。又安得為槁木死灰」、また『朱子語類』卷五十九「問操則存。曰、「心不是死物、須把做活物看。不爾則是釋氏入定坐禪」等を参照。

○感而遂通 『周易』繫辭上「寂然不動、感而遂通天下之故。非天下之至神、其孰能與於此。」

○不動心 『孟子』公孫丑上。

○動心忍性 『孟子』告子下。

○知進退存亡、而不失其正 『周易』乾・文言。

○損益盈虛與時偕行 『周易』損卦・彖伝。

○知進而不知退、知存而不知亡、知得而不知喪 『周易』乾・文言。

## 【九】

「今人以功名得失爲才不才之分。如此則孔孟亦不才乎。又有以時人相待高下爲輕重。不知我這道理、將考三王而不繆、建天地而不悖、質鬼神而無疑、百世以俟聖人而不惑。如何爲人輕重、人亦如何輕重得我。」又曰、「天地間陰中有陽、陽中有陰、故得中有喪、喪中有得。如此則都不足介意。」一友問、「處失不能無悶、如何。」曰、「水至湍流、可知百折不回。須於源頭塞住、始得。」請問源頭。曰、「平時汲汲欲得、便是悶失源頭。」又曰、「孔子分明說小人長戚戚、何苦定做小人。」又曰、「人能隨寓而安、天亦無奈我何。」

## 【訓読】

「今人功名得失を以て才不才の分と爲す。此の如くんば則ち孔孟も亦た不才なるか。又た時人の相待するの高下を以て輕重と爲す有り。知らず我が這の道理、將に三王に考えて繆あやまらず、天地に建てて悖もとらず、鬼神に質たして疑ひ無く、百世以て聖人を俟ちて惑はざるを。如何んぞ人の輕重するところと爲り、人亦た如何んぞ我を輕重（得）せん。」又た曰く、「天地の間陰中に陽有り、陽中に陰有り、故に得中に喪有り、喪中に得有り。此の如くんば、則ち都て意に介するに足らず。」一友問ふ、「失に処して悶する無きこと能

はず、如何。」曰く、「水湍流に至れば、百折回らざるを知るべし。源頭塞ぎ住むるを須ちて、始めて得ん。」源頭を請ひ問ふ。曰く、「平時に汲汲として得んと欲すれば、便ち是れ失に悶すの源頭ならん。」又た曰く、「孔子 分明に「小人 長く戚戚たり」と説く、何ぞ苦しみて小人と定め做さん。」又た曰く、「人能く寓に随ひて安んずれば、天も亦た我を奈何ともする無けん。」

〔語釈〕

○考三王而不繆、建天地而不悖、質鬼神而無疑、百世以俟聖人而不惑 『中庸』。

○小人長戚戚 『論語』述而「子曰、君子坦蕩蕩、小人長戚戚。」

【十】

問、「欲貴亦人之同心、非是不好。故孟子不禁人欲貴。但曰人人有貴於己者、弗思耳、未知是否。」先生曰、「正如此説。崇高莫大於富貴。富與貴是人之所欲也、聖人豈不欲之。但所以欲富貴者、與人異耳。」

〔訓読〕

問ふ、「貴きを欲するも亦た人の同心、是れ好からざるに非ず。故に孟子 人の貴きを欲するを禁ぜず。但だ「人人に己に貴き者有り、思はざるのみ」と曰ふは、未だ是否を知らず。」先生曰く、「正に此の説の如し。崇高は富貴より大なるは莫し。富と貴とは是れ人の欲する所なり、聖人 豈に之を欲せざらん。但だ富貴を欲する所以の者、人と異なるのみ。」

【語釈】

○欲貴亦人之同心 『孟子』告子上「孟子曰、欲貴者、人之同心也。人人有貴於己者、弗思耳矣。」

○富與貴是人之所欲也 『論語』里仁「子曰、富与貴是人之所欲也。不以其道得之、不处也。」

【十一】

素富貴、道行乎富貴、素貧賤、道行乎貧賤。夷狄患難亦然。舊謂行富貴貧賤所當行、說得散漫。

【訓読】

富貴に素しては、道富貴に行はれ、貧賤に素しては、道貧賤に行はる。夷狄・患難も亦た然り。舊富貴貧賤の当に行ふべき所を行ふと謂ふは、説き得て散漫たり。

【語釈】

○素富貴道行乎富貴、素貧賤道行乎貧賤。夷狄患難亦然 『中庸』「素富貴、行乎富貴。素貧賤、行乎貧賤。」

素夷狄、行乎夷狄。素患難、行乎患難。」

○舊謂 朱熹『中庸章句』に、「君子但因見在所居之位而為其所當為、無慕乎其外之心也」とあるのを指す。

【十二】

人言志於功名、便非天理、亦欠分曉。若以行道濟時爲心、即此便是天理。若只私便身圖、是爲人欲。天

理人欲原は一箇、顧用之何如耳。因言、古人幾字圖有以善惡平舉者、固不是。有正寫善字、旁注惡字者、依舊是兩箇心了。即是道心爲主、人心聽命之說。善惡只是一箇心。如反覆只是一箇手、不可將手背又認作一手。

### 〔訓読〕

人の「功名に志すは、便ち天理に非ず」と言ふは、亦た分曉を欠く。若し道を行ひ時を済すふを以て心と爲せば、即ち此れ便ち是れ天理。若し只だ私に便にし身みづから図れば、是れ人欲と爲す。天理人欲は原もとより是れ一箇、顧ただ用ふること何如のみ。因りて言ふ、古人幾字の図に善惡を以て平舉する者有るは、固よりはならず。善字を正写し、惡字を旁注する者有り、依旧 是れ兩箇の心（了）。即ち是れ道心 主と爲り、人心 命を聴くの說。善惡は只だ是れ一箇の心。反覆 只だ是れ一箇の手なるが如し。手背を將て又た一手と認作すべからず。

### 〔語釈〕

○以行道濟時爲心 『孟子』公孫丑下・「孟子去齊」章の集注に「此章見聖賢行道濟時、汲汲之本心、愛君 沢民、惓惓之餘意」とある。

○私便身圖 自らの利のために謀をめぐらすこと。

○古人幾字圖 周敦頤『通書』誠幾德章に「幾善惡」とある。

○正寫善字、旁注惡字 「善」字を本文とし、「惡」字を傍註とすることか。当時、陽明の『大学古本傍釈』

をはじめ、「傍註」の形式は多く行われるようになっていた。

○道心爲主、人心聽命之說 『中庸章句』序「從事於斯、無少間斷、必使道心常爲一身之主、而人心每聽命焉、則危者安、微者著、而動靜云爲、自無過不及之差矣。」

### 【十三】

問、「孟子言寡欲、周子言無欲。說者謂孟子指耳目口鼻不能無者、周子指沈湎淫佚不可有者、何如。」曰、「欲卽性也。不失本體爲正、失其本體爲邪。寡之云者、正欲去邪存正。周子恐人不知用力、故又特言無欲。則專自失其本體者言之耳。」

### 【訓読】

問ふ、「孟子 寡欲を言ひ、周子 無欲を言ふ。説く者 孟子は耳目口鼻の無きこと能はざる者を指し、周子は沈湎淫佚の有るべからざる者を指すと謂ふ、何如。」曰く、「欲は卽ち性なり。本體を失はざるを正と爲し、其の本體を失ふを邪と爲す。之を寡くすと云ふは、正に邪を去りて正を存せんと欲す。周子 人の力を用ふるを知らざるを恐る、故に又た特だ無欲を言ふ。則ち専ら自ら其の本體を失ふ者に之れを言ふのみ。」

### 【語釈】

○孟子言寡欲 『孟子』尽心下に「養心莫善於寡欲」とある。

○周子言無欲 周子は、北宋・周敦頤。前々号・雲門録【五】参照。

【十四】

「人能無欲、則本體便在這裏。吾儒謂之無欲、釋氏謂之無念。」因誦釋氏語曰、「一念不萌全體見、六根才起碧雲迷。」只是吾儒去欲之說。」

〔訓読〕

「人能く無欲なれば、則ち本体 便ち這裏に在り。吾儒は之を無欲と謂ひ、釈氏は之を無念と謂ふ。」因りて釈氏の語を誦して曰く、「一念 萌さざれば全体 見はる、六根才かに起れば碧雲の迷」。只だ是れ吾儒の欲を去るの說。」

〔語釈〕

○一念不萌全體見、六根才起碧雲迷 未詳。

【十五】

人之精神有限。吾近年深念寡欲之有力。士君子欲有所成就、非愛養精神不可。

〔訓読〕

人の精神に限り有り。吾れ近年 深く寡欲の力有るを念ふ。士君子 成就する所有らんと欲すれば、精神を愛養するに非ずんば不可なり。



## 【十六】

問四教。曰、「自其顯於外謂之文、自其體諸身謂之行、自其本諸心謂之忠信。隨地異名、實則一也。目爲四教、想亦門人記錄之意、夫子未必如此說。文莫吾猶人也、正謂威儀言辭之類。外面可觀者、容可強爲。惟以是文實體諸身爲難耳。朱子解此文字、亦作言辭。不知四教之文、與此何異。要之、論語所載、如文不在茲、博我以文、則以學文、文質彬彬、都是一箇文字。」問、「則以學文、似說讀書。」曰、「如今時童子教之學禮、必須身在那裏登降周旋、始得。不成但讀禮書、便謂之學。且若朱子解、則學文乃在孝弟謹信之後、亦與平時先知後行之說自相矛盾。」

## 【訓読】

四教を問ふ。曰く、「其の外に顯かなる自りすれば之を文と謂ひ、其の諸を身に体する自りすれば之を行と謂ひ、其の諸を心に本づくる自りすれば之を忠信と謂ふ。地に随ひて名を異にするも、実は則ち一なり。目して四教と爲すは、想ふに亦た門人記録するの意、夫子未だ必ずしも此の如く説かず。「文は吾れ猶ほ人のごときこと莫からんや」とは、正に威儀言辭の類ひを謂ふ。外面の観るべき者、強ひて爲す容可し。惟だ是の文を以て諸を身に実体するを難しと爲すのみ。朱子此の文の字を解して、亦た言辭と作す。知らず、四教の文、此と何ぞ異ならん。之を要するに、論語に載する所、「文茲に在らずや」、「我を博むるに文を以てす」、「則ち以て文を学ぶ」、「文質彬彬」の如きは、都て是れ一箇の文の字。」問ふ、「則ち以て文を学ぶ」は、読書を説くに似たり。」曰く、「今時の童子の如き、之をして礼を学ばしむるに、必ず身那裏に在

りて登降周旋するを須<sup>ま</sup>ちて、始めて得ん。但だ礼書を読むのみにして、便ち之を学と謂ふを成さず。且つ朱子の解の若きは、則ち文を学ぶは乃ち孝弟謹信の後に在り、亦た平時の先知後行の説と自ら相ひ矛盾せり。

【語釈】

○四教 『論語』述而「子以四教、文行忠信。」

○文、莫吾猶人也 『論語』述而「子曰、文、莫吾猶人也。躬行君子、則吾未之有得。」

○朱子解此文字、亦作言辭 『朱子語類』卷三十四に「文行忠信。教不以文、無由入。説与事理之類、便是文。小學六藝、皆文也」とあり、『論語大全』当該章にも引用される。

○文不在茲 『論語』子罕。

○博我以文 『論語』子罕。

○則以學文 『論語』学而「行有餘力、則以學文。」

○文質彬彬 『論語』雍也。

○登降周旋 公の場における進退揖讓の具体的な動作。

○不成 反詰を表す語。「まさか……ではあるまい」。

【十七】

問學于古訓、乃有獲。曰、「書意自明、細讀之自見。此二句是承「人求多聞、時惟建事」。説來言、「多聞但可建事、於我何益。必于古訓而學、始能有獲」。曰、「多聞與學古訓、何益。」曰、「多聞是口耳之聞、學

却有工夫。如精一克復、皆古訓也。吾從而精之一之、克之復之、是謂學于古訓。」曰、「多聞、既是口耳、如何建事。」曰、「如欲建此室、何處取材、何處鳩工。規制營度、必資多聞。說命之意、蓋以國家創制立法議禮作樂資於多聞、則可耳。若致治之本、非着實從古訓上學、不可得也。然此法制禮樂、苟只依所聞去做、不師古人從致治之本上發出來、則亦但可粉飾一時、而非久安長治之道矣。故又曰、事不師古、以克永世、匪說攸聞。由此言之、則雖建事亦必由學、不可專恃多聞矣。此正天德王道合一之理。古人說得多少周匝。今人不曾其意、反舉此以詆陽明先生之說。」

### 〔訓誦〕

「古訓に學べば、乃ち獲ること有り」を問ふ。曰く、「書意自明なり、之を細誦すれば自ら見る。此の二句は是れ「人多聞を求む、時れ惟れ事を建つ」を承く。說來たりて言ふ、「多聞は但だ事を建つべし、我に於ては何の益あらん。必ず古訓に於て學び、始めて能く獲ること有り」と。」曰く、「多聞と古訓に學ぶとは、何れか益あらん。」曰く、「多聞は是れ口耳の聞、學は却て工夫有り。「精一」「克復」の如きは、皆な古訓なり。吾れ從つて之を精にし之を一にし、之に克ち之に復す、是れ古訓を學ぶと謂ふ。」曰く、「多聞は既に是れ口耳、如何ぞ事を建てん。」曰く、「如し此の室を建てんと欲すれば、何れの処にか材を取り、何れの処にか工を鳩めん。規制營度、必ず多聞に資る。說命の意、蓋し國家制を創り法を立て、礼を議し樂を作るを以て多聞に資るは、則ち可なるのみ。致治の本の若きは、着実に古訓上從り學ぶに非ざれば得べからざるなり。然して此の法制礼樂も、苟くも只だ聞く所に依りて去き倣し、古人を師として致治の本上從り発（出来）せざれば、則ち亦た但だ一時を粉飾すべきのみにして、久安長治の道に非ざるなり。故に

又た曰く、「事古を師とせずして、以て克く世を永くするは、説の聞く攸に匪とこず」。此に由りて之を言へば、則ち事を建つと雖も、亦た必ず學に由りて、専ら多聞を待たむべからず。此れ正に天徳王道合一の理なり。古人説（得）きて多少周匝しうさふ。今人其の意を会せず、反て此を拏とげて以て陽明先生の説を詆る。」

〔語釈〕

○學于古訓乃有獲・人求多聞、時惟建事 『尚書』説命下「説曰、王、人求多聞、時惟建事。學于古訓、乃有獲。事不師古、以克永世、匪説攸聞。」

○精一 『尚書』大禹謨「人心惟危、道心惟微、惟精惟一、允執厥中。」

○克復 『論語』顏淵「克己復礼為仁。一日克己復礼、天下歸仁焉。為仁由己、而由人乎哉。」

○鳩工 人夫を募る、労働者を集める。

○不師古人從致治之本上發出來 否定辞「不」は「發出來」まで全てに係る。「古人を師とすることによつて政治の根本から発するのでなければ」。

○事不師古、以克永世、匪説攸聞 『尚書』説命下、前掲。

○古人説得多少周匝 「多少」は感嘆を表す語。「古人の言説はなんと周到であることか」。

【十八】

何必讀書然後爲學、此語原不差。但子路却是假此正理、拏其使子羔之失。故夫子直惡其佞。

〔訓読〕

「何ぞ必ずしも書を読み、然る後學を為さん」、此の語原より差はず。但だ子路却て是れ此の正理に仮りて、其の「子羔をして（……）せしむ」の失を拵ふ。故に夫子直ちに其の佞を惡む。

〔語釈〕

○何必讀書然後爲學 『論語』先進「子路使子羔爲費宰。子曰、賊夫人之子。子路曰、有民人焉、有社稷焉。何必讀書然後爲學。子曰、是故惡夫佞者。」

【十九】

問、「非知之艱、行之惟艱、似以知行分兩件。」曰、「此知字說得淺、乃聞見之知、如論語知之次也之類。大抵知行本體、原離不得。人之所造、乃有淺深。如民可使由之、不可使知之、百姓日用而不知、終身由之而不知其道、又是知難行易、皆非知行本體矣。」曰、「中庸生知學知困知安行勉行利行、亦分言之、何也。」曰、「知行二字、須要還他、但析不開耳。言知便有行在、言行便有知在。行是應迹處、知是主張處。知行即是乾坤。萬物之生、得氣于天、成形于地。豈有先後。知屬乾、行屬坤。故曰、知崇禮卑、崇效天、卑法地。」又曰、「乾以易知、坤以簡能。乾知大始、坤作成物。此知字下得好、便是知行之知。朱子訓作主字。主便兼有行意。不知於知行二字、如何看得隔礙。」

〔訓読〕

問ふ、「知るの艱きに非ず、行ふの惟れ艱し」は、知行を以て兩件に分つに似たり。」曰く、「此の知の字說（得）きて淺し、乃ち聞見の知、論語の「知の次なり」の類の如し。大抵知行の本体は、原より離

れ得ず。人の造る所は、乃ち淺深有り。「民は之に由らしむべし、之を知らしむべからず」、「百姓 日に用ひて知らず」、「終身之に由りて其の道を知らず」の如き、又た是れ知るは難く行ふは易きにして、皆な知行の本体に非ず。」曰く、「中庸の生知・学知・困知・安行・勉行・利行も、亦た分ちて之を言ふ、何ぞや。」曰く、「知行の二字、須要く他に還すべし。但だ析するも開かざるのみ。知を言へば便ち行有り（在）、行を言へば便ち知有り（在）。行は是れ迹に應ずる處、知は是れ主張する處。知行は即ち是れ乾坤。萬物の生、氣を天に得、形を地に成す。豈に先後有らんや。知は乾に属し、行は坤に属す。故に曰く、「知は崇く礼は卑く、崇きは天に效ひ、卑きは地に法る」と。」又た曰く、「乾は易を以て知り、坤は簡を以て能くす。乾 大始を知り、坤 成物を作す。」此の知字 下し得て好し。便ち是れ知行の知なり。朱子 訓じて主字と作す。主は便ち兼ねて行の意有り。知らず 知行の二字に於て、如何ぞ看（得）て隔礙たらんと。」

〔語釈〕

○非知之艱、行之惟艱 『尚書』說命中「說拝稽首曰、非知之艱、行之惟艱。王忱不艱、允協于先王成德。惟說不言、有厥咎。」また『伝習錄』下においても知行合一に對する疑義としてこの箇所が引かれている。「或疑知行不合一、以「知之匪艱」二句為問。先生曰、「良知自知、原是容易的。只是不能致那良知、便是「知之匪艱、行之惟艱」。」

○知之次也 『論語』述而「蓋有不知而作之者、我無是也。多聞挾其善者而從之、多見而識之、知之次也。」

○民可使由之、不可使知之 『論語』泰伯。

○百姓日用而不知 『周易』繫辭上。

○終身由之而不知其道 『孟子』 尽心上。

○中庸生知學知困知安行勉行利行 『中庸』 「或生而知之、或學而知之、或困而知之、及其知之、一也。或安而行之、或利而行之、或勉強而行之、及其成功、一也。」

○須要還他 「それ自体そのままである」の意。『朱子語類』卷一「邵堯夫經世吟云「……千世万世、中原有人」。蓋一治必又一乱、一乱必又一治。夷狄只是夷狄、須是還他中原、また同卷六十二「或曰、「恐衆人未發、与聖人異否。」曰、「未發只做得未發。不然、是無大本、道理絶了。」或曰、「恐衆人於未發昏了否。」曰、「這裏未有昏明、須是還他做未發」」等を参照。

○知崇禮卑、崇效天、卑法地 『周易』 繫辭上。

○乾以易知、坤以簡能。乾知大始、坤作成物。 『周易』 繫辭上「乾道成男、坤道成女。乾知大始、坤作成物。乾以易知、坤以簡能。易則易知、簡則易從。」

○朱子訓作主字 『周易本義』は「乾知大始、坤作成物」に「知、猶主也。乾主始物而坤作成之」と註する。

## 【二十】

問大學道學自修。曰、「學是學善、修是去惡、總是一箇工夫。言主忠信、又言徙義、言崇德、又言修慝、皆此類。」

## 〔訓読〕

大学の道学・自修を問ふ。曰く、「学は是れ善を学び、修は是れ惡を去る、総て是れ一箇の工夫。「忠信

を主とす」と言ひ、又た「徙義」と言ひ、又た「修慝」と言ふ。皆な此の類ひなり。」

〔語釈〕

○大學道學自修 『大学』「詩云、瞻彼淇澳、萋竹猗猗。有斐君子、如切如磋、如琢如磨。瑟兮僖兮、赫兮喧兮。有斐君子、終不可諠兮。如切如磋者、道學也。如琢如磨者、自修也。瑟兮僖兮者、恂慄也。赫兮喧兮者、威儀也。有斐君子、終不可諠兮者、道盛德至善、民之不能忘也。」

○主忠信・徙義 『論語』顏淵「子張問崇德、辨惑。子曰、主忠信、徙義、崇德也。愛之欲其生、惡之欲其死。既欲其生、又欲其死、是惑也。誠不以富、亦祇以異。」

○崇德・修慝 『論語』顏淵「樊遲從遊於舞雩之下、曰、敢問崇德、修慝、辨惑。子曰、善哉問。先事後得、非崇德與。攻其惡、無攻人之惡、非修慝與。一朝之忿、忘其身以及其親、非惑與。」

【二十一】

偶思知止定靜安慮能得之說、見得又別。蓋定靜安即寂然不動、慮即感而遂通。吾心本體自如此、便是止。能知止、便定靜安。定靜安、便慮。定靜安慮、便是得。

〔訓読〕

たまたま

偶「知止・定・静・安・慮にして能く得」の說を思ふに、見得て又た別たり。蓋し定・静・安は即ち寂然不動、慮は即ち感じて遂に通ず。吾が心の本体 自ら此の如きは、便ち是れ止。能く止るを知るは、便ち定・静・安。定・静・安は、便ち慮。定・静・安・慮、便ち是れ得。



〔語釈〕

○知止定靜安慮能得 『大学』「知止而后有定、定而后能靜、靜而后能安、安而后能慮、慮而后能得。」

○寂然不動・感而遂通 『周易』繫辭上「易、無思也、無為也。寂然不動、感而遂通天下之故。」

【二十二】

「喜怒哀樂未發謂中、發而中節謂和。不可將未發是一時、已發又是一時。未發是寂、已發是感。寂時未嘗無感、感時未嘗非寂。心體常感、原無兩箇時節。」一友問、「未應事、何以言感。」曰、「常視常聽、便是感。鑑無時不照、心無時不感。程子所謂「體用一源、顯微無間」、陽明先生所謂「其靜也、常覺而未嘗無也、故常應。其動也、常定而未嘗有也、故常寂」、某向時所論舉扇及燭光之譬、皆是此意。」

〔訓読〕

喜怒哀樂 未だ発せざるを中と謂ひ、発して節に中るを和と謂ふ。將て未発は是れ一時、已發は又た是れ一時とすべからず。未發は是れ寂、已發は是れ感。寂時 未だ嘗て感無くんばあらず、感時 未だ嘗て寂に非ずんばあらず。心体 常に感じ、原より兩箇の時節無し。」一友問ふ、「未だ事に応ぜずして、何を以て感と言はん。」曰く、「常視・常聽は、便ち是れ感。鑑は時として照らさざる無し、心は時として感ぜざる無し。程子の所謂る「体用一源にして、顯微間無し」、陽明先生の所謂る「其れ静や、常に覺めて未だ嘗て無からざるなり、故に常に応ず。其れ動や、常に定まりて未だ嘗て有らざるなり、故に常に寂たり」、某

向時論ずる所の扇を挙げて燭光に及ぶの譬、皆な是れ此の意なり。」

〔語釈〕

○喜怒哀樂未發謂中、發而中節謂和 『中庸』「喜怒哀樂之未發、謂之中。發而皆中節、謂之和。」

○體用一源、顯微無間 『程氏易伝』序「至微者理也、至著者象也。体用一源、顯微無間。」

○其靜也々故常寂 『王文成公全書』卷五・答倫彦式。

○某向時所論舉扇及燭光之譬 前号・雲門録【五九】参照。

〔研究ノート〕

(一) 第一則で薛侃は「合得本體是工夫、做得工夫是本體」という陽明の語を引くが、これは『王文成公全書』に見られない語である。薛侃が直接陽明から聞いた語と考えられる。

(二) 第三則では静坐について、「初学入門」の事としているが、薛侃にはまた積極的に静坐を否定しようとする様子もみられない。これは、陽明学の静坐に対する姿勢を考える上で参考になろう。

(三) 第二十則・第二十一則で薛侃は『大学』の解釈をしているが、これは『大学問』や『大学古本傍釈』に依らない薛侃独自の解釈である。陽明は『大学古本傍釈』を最終的には破棄しており、弟子たちが独自に『大学』解釈を行ってゆく余地が残った。『大学古本傍釈』編纂にも関わった薛侃ですら『大学』に独自の解釈を行っていることは、陽明学の『大学』に対する姿勢について考察するための資料となり得よう。